

# 平成 17 年国勢調査従業地・通学地集計結果の概要

平成 17 年 10 月 1 日現在で実施された平成 17 年国勢調査の従業地・通学地集計結果が公表されましたので、その概要を紹介します。なお、用語の定義・解説は最終ページを参照して下さい。

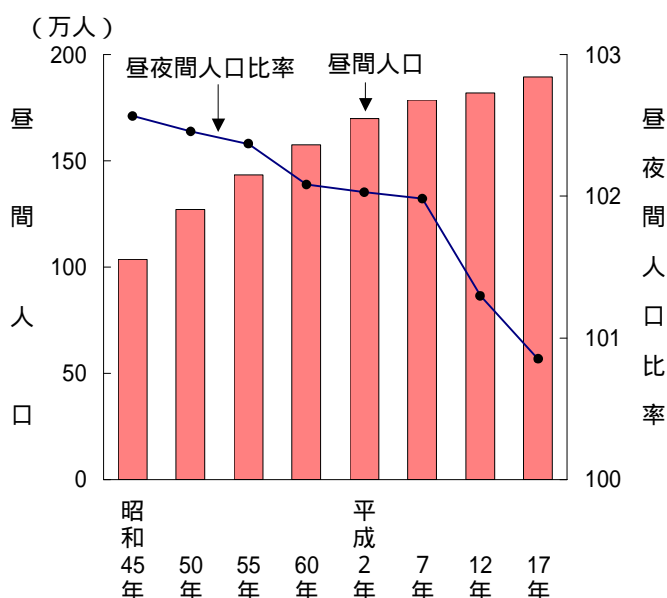
## 1 昼間人口

昼夜間人口比率は 12 年に次いで大きく低下

平成17年10月1日現在の札幌市の昼間人口は1,893,946人で、前回調査の12年(1,820,757人)に比べて73,189人の増加(4.0%増)となっており、昼夜間人口比率(常住人口100人当たりの昼間人口)は100.9で、12年(101.3)に比べて0.4ポイント低下した。昭和45年以降の推移をみると、昼間人口は増加を続けているのに対し、昼夜間人口比率は低下を続けており、昭和45年～平成7年は緩やかに低下していたが、12年に101.3と大きく低下し、17年も12年に次いで大きく低下した。

昼間人口のうち、市外から通勤・通学する流入人口は85,032人で、12年(85,470人)に比べて438人の減少(0.5%減)とわずかに減少した。一方、市内常住者のうち市外へ通勤・通学する流出人口は69,051人で、12年(62,192人)に比べて6,859人の増加(11.0%増)と1割以上の増加となった。流入人口と流出人口の差である流入超過人口は15,981人で、12年(23,278人)に比べて7,297人の減少(31.3%減)となった。

第 1 図 昼間人口及び昼夜間人口比率の推移  
(各年10月1日現在)



注：第 1 表参照。  
<資料> 総務省統計局「国勢調査」

第 1 表 昼間人口の推移

年齢「不詳」は含まない。

年次	各年10月1日現在					
	昼間人口 (A)=(B)+(E)	常住人口 (B)	流入人口 (C)	流出人口 (D)	流入超過人口 (E)=(C)-(D)	昼夜間人口比率 (A)/(B)
昭和45年	1,036,046	1,010,123	33,819	7,896	25,923	102.6
50年	1,270,344	1,239,884	45,719	15,259	30,460	102.5
55年	1,433,137	1,399,962	56,915	23,740	33,175	102.4
60年	1,574,342	1,542,242	61,861	29,761	32,100	102.1
平成2年	1,698,926	1,665,169	74,558	40,801	33,757	102.0
7年	1,786,889	1,752,149	89,058	54,318	34,740	102.0
12年	1,820,757	1,797,479	85,470	62,192	23,278	101.3
17年	1,893,946	1,877,965	85,032	69,051	15,981	100.9

<資料> 総務省統計局「国勢調査」

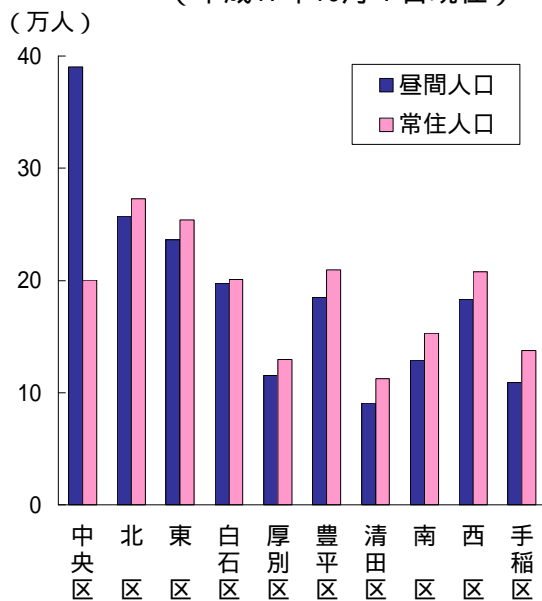
## 2 区別の昼間人口

昼夜間人口比率は中央区が194.7と10区中唯一100を超えている

昼間人口を区別にみると、中央区が390,438人と最も多く、以下、北区が257,035人、東区が235,844人、白石区が197,648人、豊平区が184,847人、西区が183,528人、南区が128,940人、厚別区が115,493人、手稲区が109,322人、清田区が90,851人の順となっている。

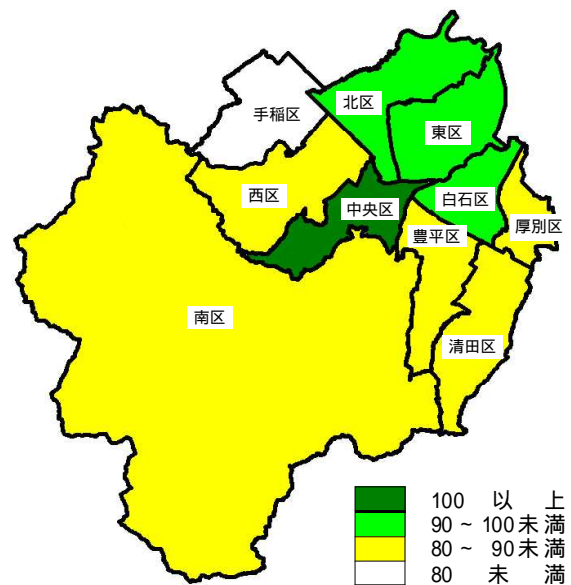
昼夜間人口比率をみると、中央区が194.7と10区中唯一100を超えているが、他の9区では、白石区が98.2、北区が94.2、東区が92.9、厚別区が89.2、西区が88.5、豊平区が88.3、南区が84.3、清田区が80.6、手稲区が79.5となっており、中央区の比率が突出している。これは、事業所が中央区に集中していることが主な要因と考えられる。

第2図 区別昼間人口及び常住人口  
(平成17年10月1日現在)



注：第2表参照。  
<資料> 総務省統計局「国勢調査」

第3図 区別昼夜間人口比率  
(平成17年10月1日現在)



注：第2表参照。  
<資料> 総務省統計局「国勢調査」

第2表 区別昼間人口

年齢「不詳」は含まない。 内の数字は、10区中の順位である。

区	平成17年10月1日現在					
	昼間人口 (A)=(B)+(E)	常住人口 (B)	流入人口 (C)	流出人口 (D)	流入超過人口 (E)=(C)-(D)	昼夜間人口比率 (A)/(B)
全市	1,893,946	1,877,965	85,032	69,051	15,981	100.9
中央区	390,438	200,535	220,658	30,755	189,903	194.7
北区	257,035	272,831	58,741	74,537	15,796	94.2
東区	235,844	253,827	48,769	66,752	17,983	92.9
白石区	197,648	201,254	52,538	56,144	3,606	98.2
厚別区	115,493	129,432	28,602	42,541	13,939	89.2
豊平区	184,847	209,425	41,459	66,037	24,578	88.3
清田区	90,851	112,783	15,907	37,839	21,932	80.6
南区	128,940	153,021	17,021	41,102	24,081	84.3
西区	183,528	207,325	36,922	60,719	23,797	88.5
手稲区	109,322	137,532	16,036	44,246	28,210	79.5

<資料> 総務省統計局「国勢調査」

### 3 流入人口

江別市からの流入人口が24,334人で最も多い

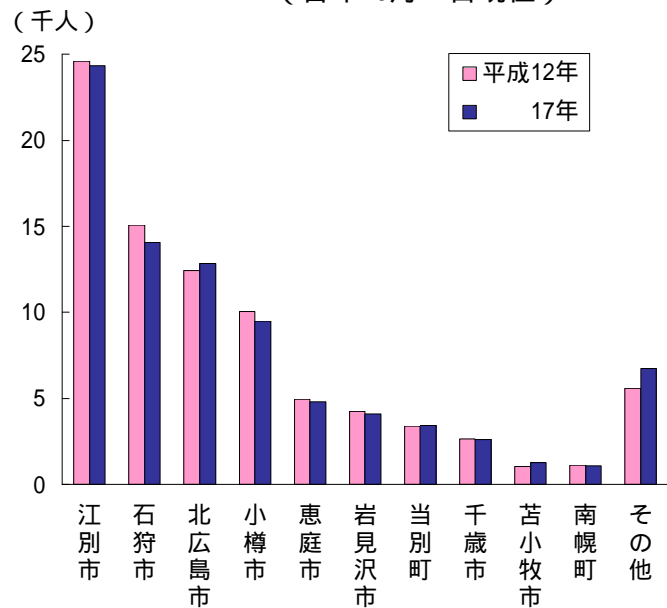
平成17年の流入人口を市町村別にみると、江別市からが24,334人と2万人を超えて最も多く、以下、石狩市が14,076人、北広島市が12,838人、小樽市が9,489人などと続いており、上位4市で全体の7割以上を占めている。

流入人口の12～17年の増加状況をみると、石狩市が1,004人の減少（6.7%減）、小樽市が556人の減少（5.5%減）など、多くの市町村で減少しているが、北広島市が389人の増加（3.1%増）、苫小牧市が234人の増加（22.4%増）などで増加している。

流入人口を通勤者と通学者に分けてみると、通勤者は江別市からが21,773人で最も多く、以下、石狩市が12,399人、北広島市が11,458人などと続いている。通学者は江別市からが2,561人で最も多く、以下、石狩市が1,677人、小樽市が1,497人などと続いている。

流入人口の通勤・通学別割合をみると、ほとんどの市町村で通勤者の割合が8割を超えているが、苫小牧市（通勤者56.2%、通学者43.8%）や千歳市（通勤者67.2%、通学者32.8%）では通学者の割合が比較的高くなっている。

第4図 他市町村からの流入人口  
（各年10月1日現在）



注： 第3表参照。  
<資料> 総務省統計局「国勢調査」

第3表 他市町村からの流入人口

年齢「不詳」及び15歳未満通学者を含まない。

市町村	各年10月1日現在									
	平成12年 1)	17年			12～17年		17年割合(%)			
		総数	通勤者	通学者	増加数	増加率(%)	総数	通勤者	通学者	
総数	85,215	84,765	71,621	13,144	450	0.5	100.0	84.5	15.5	
江別市	24,610	24,334	21,773	2,561	276	1.1	100.0	89.5	10.5	
石狩市	15,080	14,076	12,399	1,677	1,004	6.7	100.0	88.1	11.9	
北広島市	12,449	12,838	11,458	1,380	389	3.1	100.0	89.3	10.7	
小樽市	10,045	9,489	7,992	1,497	556	5.5	100.0	84.2	15.8	
恵庭市	4,940	4,802	3,832	970	138	2.8	100.0	79.8	20.2	
岩見沢市	4,266	4,107	3,343	764	159	3.7	100.0	81.4	18.6	
当別町	3,398	3,426	2,739	687	28	0.8	100.0	79.9	20.1	
千歳市	2,655	2,598	1,745	853	57	2.1	100.0	67.2	32.8	
苫小牧市	1,044	1,278	718	560	234	22.4	100.0	56.2	43.8	
南幌町	1,122	1,073	909	164	49	4.4	100.0	84.7	15.3	
その他の市町村	5,606	6,744	4,713	2,031	1,138	20.3	100.0	69.9	30.1	

注： 1) 平成17年10月1日現在の境域に組替えた数値である。

<資料> 総務省統計局「国勢調査」

#### 4 流出入口

石狩市、江別市、小樽市及び北広島市の4市で流出入口の3分の2以上を占める

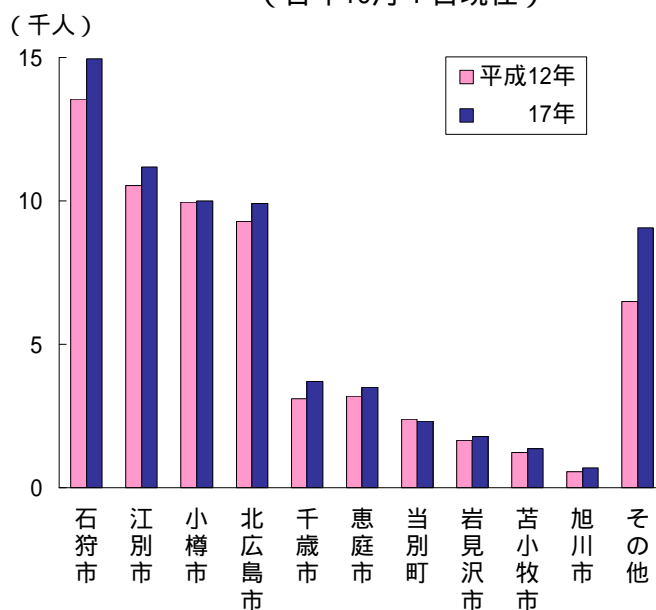
平成17年の流出入口を市町村別にみると、石狩市へが14,950人で最も多く、以下、江別市が11,192人、小樽市が10,007人、北広島市が9,914人などと続いており、上位4市で全体の3分の2以上を占めている。

流出入口の12～17年の増加状況をみると、石狩市が1,394人の増加（10.3%増）と最も多く増加しており、以下、江別市が644人の増加（6.1%増）、北広島市が631人の増加（6.8%増）、千歳市が613人の増加（19.8%増）など、ほとんどの市町村で増加している。

流出入口を通勤者と通学者に分けてみると、通勤者は石狩市へが13,337人で最も多く、以下、北広島市が8,517人、小樽市が8,332人などと続いている。通学者は江別市へが4,520人で最も多く、以下、小樽市が1,675人、石狩市が1,613人などと続いている。

流出入口の通勤・通学別割合をみると、通勤者の割合は苫小牧市（95.5%）、旭川市（91.1%）などで高く、通学者の割合は当別町（43.5%）、江別市（40.4%）などで高くなっている。

第5図 他市町村への流出入口  
（各年10月1日現在）



注：第4表参照。  
＜資料＞ 総務省統計局「国勢調査」

第4表 他市町村への流出入口

年齢「不詳」及び15歳未満通学者を含まない。

市町村	平成12年 1)	17年		12～17年		17年割合(%)			
		総数	通勤者	通学者	増加数	増加率(%)	総数	通勤者	通学者
総数	62,031	68,573	55,935	12,638	6,542	10.5	100.0	81.6	18.4
石狩市	13,556	14,950	13,337	1,613	1,394	10.3	100.0	89.2	10.8
江別市	10,548	11,192	6,672	4,520	644	6.1	100.0	59.6	40.4
小樽市	9,963	10,007	8,332	1,675	44	0.4	100.0	83.3	16.7
北広島市	9,283	9,914	8,517	1,397	631	6.8	100.0	85.9	14.1
千歳市	3,099	3,712	3,265	447	613	19.8	100.0	88.0	12.0
恵庭市	3,201	3,520	2,794	726	319	10.0	100.0	79.4	20.6
当別町	2,400	2,335	1,320	1,015	65	2.7	100.0	56.5	43.5
岩見沢市	1,660	1,796	1,450	346	136	8.2	100.0	80.7	19.3
苫小牧市	1,237	1,376	1,314	62	139	11.2	100.0	95.5	4.5
旭川市	574	695	633	62	121	21.1	100.0	91.1	8.9
その他の市町村	6,510	9,076	8,301	775	2,566	39.4	100.0	91.5	8.5

注：1) 平成17年10月1日現在の境域に組替えた数値である。  
＜資料＞ 総務省統計局「国勢調査」

## 5 流入超過人口

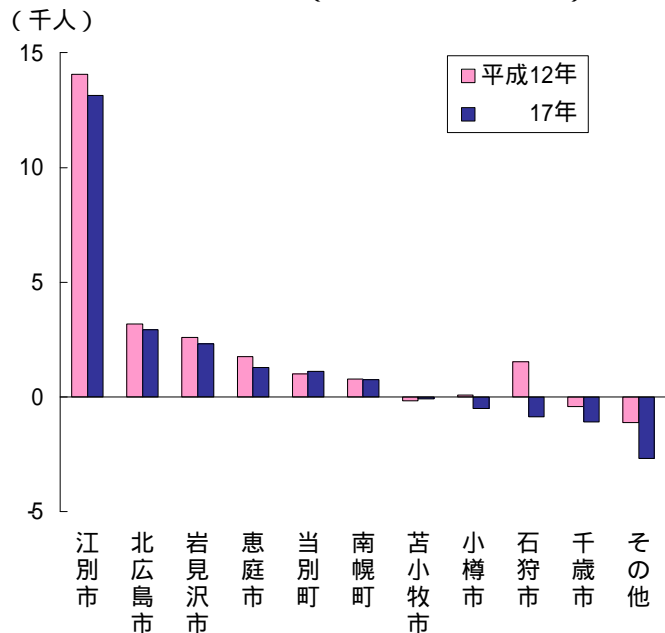
12年に比べて、石狩市及び小樽市で流出超過に転じている

流入人口が多い10市町について、平成17年の流入超過人口をみると、江別市が13,142人の流入超過と1万人を超えて最も多く、以下、北広島市が2,924人、岩見沢市が2,311人など6市町で流入超過となっている。一方、千歳市は1,114人の流出超過となっており、石狩市(874人)、小樽市(518人)、苫小牧市(98人)でも流出超過となっている。

12～17年の流入超過人口の増減をみると、苫小牧市が95人の増加、当別町が93人の増加となっている。一方、石狩市が2,398人の減少、江別市が920人の減少、千歳市が670人の減少、小樽市が600人の減少など、8市町で減少しており、特に石狩市及び小樽市は、流入超過から流出超過に転じている。

流入超過人口を通勤者と通学者に分けてみると、通勤者は江別市が15,101人と1万5千人を超す流入超過となっており、以下、北広島市(2,941人)、岩見沢市(1,893人)など6市町で流入超過となっている。通学者は苫小牧市(498人)、岩見沢市(418人)など、6市町で流入超過となっているが、通勤者で流入超過の多い江別市は1,959人の流出超過となっている。

第6図 他市町村からの流入超過人口  
(各年10月1日現在)



注：第5表参照。  
<資料> 総務省統計局「国勢調査」

第5表 他市町村からの流入超過人口

年齢「不詳」及び15歳未満通学者を含まない。

市町村	各年10月1日現在								
	平成12年1)			17年			増加数		
	総数	通勤者	通学者	総数	通勤者	通学者	総数	通勤者	通学者
総数	23,184	22,341	843	16,192	15,686	506	6,992	6,655	337
江別市	14,062	15,681	1,619	13,142	15,101	1,959	920	580	340
北広島市	3,166	3,118	48	2,924	2,941	17	242	177	65
岩見沢市	2,606	2,218	388	2,311	1,893	418	295	325	30
恵庭市	1,739	1,306	433	1,282	1,038	244	457	268	189
当別町	998	1,395	397	1,091	1,419	328	93	24	69
南幌町	768	641	127	728	569	159	40	72	32
苫小牧市	193	514	321	98	596	498	95	82	177
小樽市	82	554	472	518	340	178	600	894	294
石狩市	1,524	1,001	523	874	938	64	2,398	1,939	459
千歳市	444	1,046	602	1,114	1,520	406	670	474	196
その他の市町村	1,124	2,013	889	2,682	3,881	1,199	1,558	1,868	310

注：1) 平成17年10月1日現在の境域に組替えた数値である。  
<資料> 総務省統計局「国勢調査」

## 6 通勤・通学依存度

札幌市への通勤・通学依存度は石狩市が44.8%で最も高い

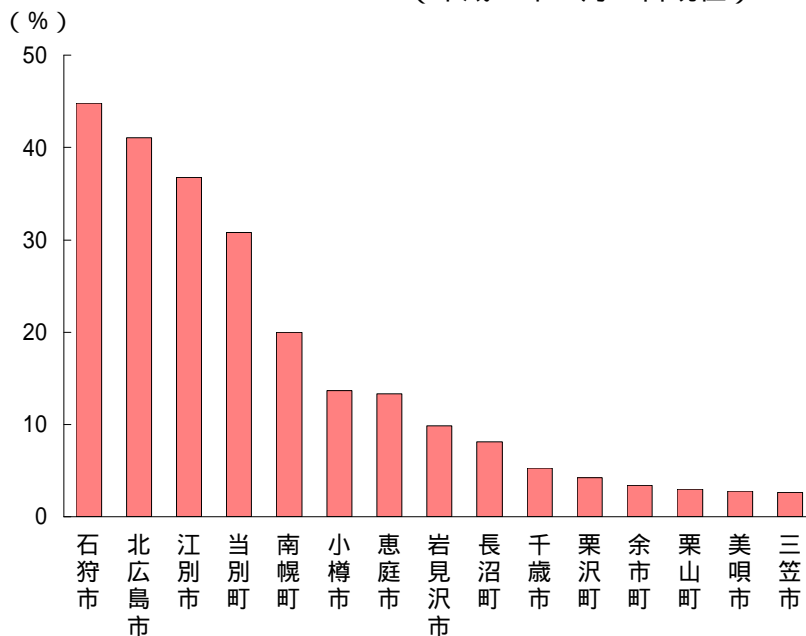
平成17年の他市町村の札幌市への通勤・通学依存度（当該市町村に常住する15歳以上の就業者・通学者のうち札幌市で従業・通学する者の割合）をみると、石狩市が44.8%で最も高く、以下、北広島市が41.1%、江別市が36.8%、当別町が30.8%、南幌町が20.0%などと続いている。

通勤・通学依存度を通勤及び通学に分けてみると、通勤依存度は、石狩市が43.8%で最も高く、以下、北広島市が42.4%、江別市が40.8%、当別町が30.1%、南幌町が19.3%などと続いている。

通学依存度は、石狩市が54.2%と50%を超えて最も高く、以下、当別町が34.1%、北広島市が32.6%、南幌町が25.3%、小樽市が20.9%などと続いている。

通勤依存度と通学依存度を比べると、ほとんどの市町村で通学依存度が通勤依存度を上回っているが、北広島市及び江別市では通勤依存度が通学依存度を上回っている。

第7図 主な市町村別札幌市への通勤・通学依存度  
(平成17年10月1日現在)



注：第6表参照。  
<資料> 総務省統計局「国勢調査」

第6表 主な市町村別札幌市への通勤・通学依存度

年齢「不詳」及び15歳未満通学者を含まない。札幌市への流入人口が100人未満の市町村は省略している。

平成17年10月1日現在

市町村	札幌市への流入人口 (A)			各市町村の常住就業者・通学者数 (B)			通勤・通学依存度 (%) (A)/(B)		
	総数	通勤	通学	総数	通勤	通学	総数	通勤	通学
石狩市	14,076	12,399	1,677	31,409	28,314	3,095	44.8	43.8	54.2
北広島市	12,838	11,458	1,380	31,266	27,032	4,234	41.1	42.4	32.6
江別市	24,334	21,773	2,561	66,150	53,401	12,749	36.8	40.8	20.1
当別町	3,426	2,739	687	11,109	9,097	2,012	30.8	30.1	34.1
南幌町	1,073	909	164	5,360	4,711	649	20.0	19.3	25.3
小樽市	9,489	7,992	1,497	69,440	62,284	7,156	13.7	12.8	20.9
恵庭市	4,802	3,832	970	36,133	31,398	4,735	13.3	12.2	20.5
岩見沢市	4,107	3,343	764	41,651	37,195	4,456	9.9	9.0	17.1
長沼町	587	482	105	7,246	6,664	582	8.1	7.2	18.0
千歳市	2,598	1,745	853	49,336	44,843	4,493	5.3	3.9	19.0
栗沢町	153	99	54	3,635	3,366	269	4.2	2.9	20.1
余市町	385	221	164	11,500	10,243	1,257	3.3	2.2	13.0
栗山町	231	168	63	7,721	7,101	620	3.0	2.4	10.2
美唄市	396	220	176	14,429	12,580	1,849	2.7	1.7	9.5
三笠市	127	82	45	4,799	4,416	383	2.6	1.9	11.7

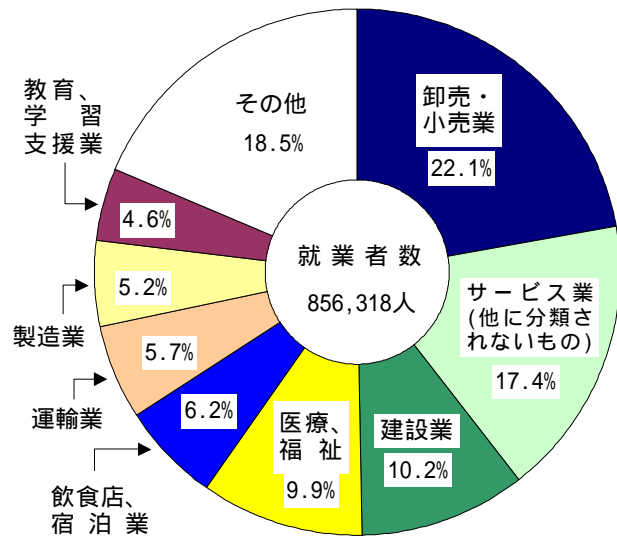
<資料> 総務省統計局「国勢調査」

## 7 産業

第3次産業を中心に11産業で流入超過  
平成17年の従業地による15歳以上就業者を産業3部門別にみると、第1次産業就業者が3,256人（全体の0.4%）、第2次産業就業者が132,484人（15.5%）、第3次産業就業者が639,112人（80.9%）となっており、第3次産業就業者が全体の8割以上を占めている。

就業者を産業大分類別にみると、「卸売・小売業」が189,332人で全体の22.1%を占めて最も多く、以下、「サービス業（他に分類されないもの）」が149,087人（17.4%）、「建設業」が87,321人（10.2%）、「医療、福祉」が85,103人（9.9%）、「飲食店、宿泊業」が53,363人（6.2%）などと続いている。

第8図 従業地による産業（大分類）別15歳以上就業者数の割合  
（平成17年10月1日現在）



<資料> 総務省統計局「国勢調査」

第7表 常住地・従業地による産業（大分類）別15歳以上就業者数

産業（大分類）	数	15歳以上就業者数					割合 (%)		
		昼間	常住	流入	流出	流入超過	昼間	流入	流出
総	856,318	840,632	71,621	55,935	15,686	100.0	100.0	100.0	
農林業	2,884	3,142	150	408	258	0.3	0.2	0.7	
漁業	303	303	48	48	-	0.0	0.1	0.1	
鉱業	69	107	12	50	38	0.0	0.0	0.1	
建設業	356	358	30	32	2	0.0	0.0	0.1	
製造業	87,321	84,503	10,028	7,210	2,818	10.2	14.0	12.9	
電気・ガス・熱供給・水道業	44,807	49,155	4,266	8,614	4,348	5.2	6.0	15.4	
情報通信業	4,262	4,182	461	381	80	0.5	0.6	0.7	
運輸業	34,268	31,167	3,780	679	3,101	4.0	5.3	1.2	
卸売・小売業	48,897	49,651	6,265	7,019	754	5.7	8.7	12.5	
金融・保険業	189,332	184,384	14,726	9,778	4,948	22.1	20.6	17.5	
不動産業	25,245	23,783	2,329	867	1,462	2.9	3.3	1.6	
飲食店、宿泊業	20,003	19,316	980	293	687	2.3	1.4	0.5	
医療、福祉	53,363	51,966	2,811	1,414	1,397	6.2	3.9	2.5	
教育、学習支援業	85,103	84,474	5,202	4,573	629	9.9	7.3	8.2	
複合サービス事業	39,790	40,488	3,359	4,057	698	4.6	4.7	7.3	
サービス業（他に分類されないもの）	7,638	7,412	674	448	226	0.9	0.9	0.8	
公務（他に分類されないもの）	149,087	144,243	12,125	7,281	4,844	17.4	16.9	13.0	
分類不能の産業	36,124	34,679	3,255	1,810	1,445	4.2	4.5	3.2	
（再掲）	27,466	27,319	1,120	973	147	3.2	1.6	1.7	
第1次産業	3,256	3,552	210	506	296	0.4	0.3	0.9	
第2次産業	132,484	134,016	14,324	15,856	1,532	15.5	20.0	28.3	
第3次産業	693,112	675,745	55,967	38,600	17,367	80.9	78.1	69.0	

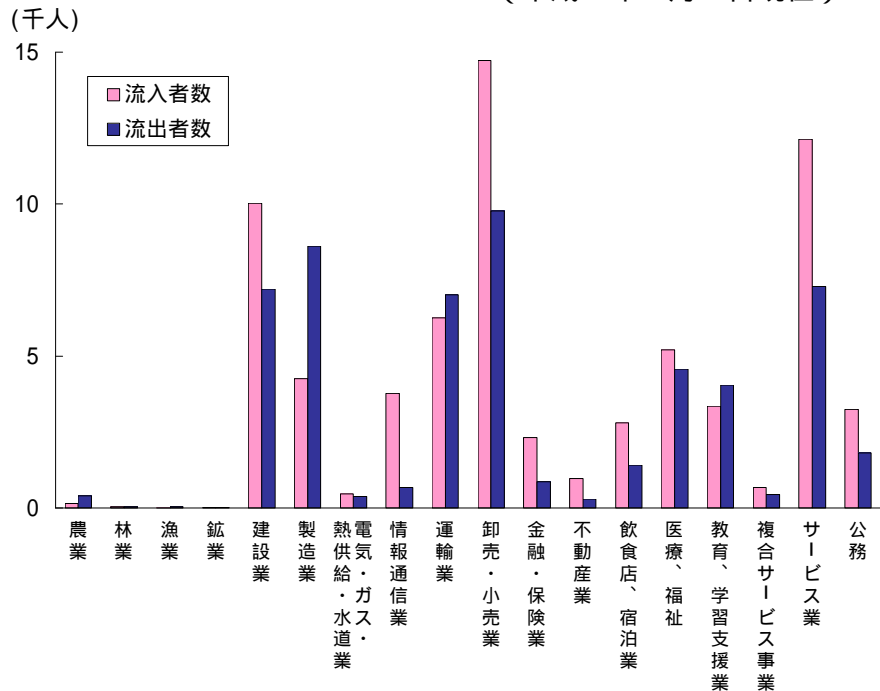
<資料> 総務省統計局「国勢調査」

流入就業者を産業大分類別にみると、「卸売・小売業」が14,726人で全体の20.6%を占めて最も多く、次いで「サービス業（他に分類されないもの）」が12,125人（16.9%）、「建設業」が10,028人（14.0%）と3産業で1万人を超えている。以下、「運輸業」が6,265人（8.7%）、「医療、福祉」が5,202人（7.3%）などと続いている。

流出就業者を産業大分類別にみると、「卸売・小売業」が9,778人で全体の17.5%を占めて最も多く、以下、「製造業」が8,614人（15.4%）、「サービス業（他に分類されないもの）」が7,281人（13.0%）、「建設業」が7,210人（12.9%）、「運輸業」が7,019人（12.5%）などと続いている。

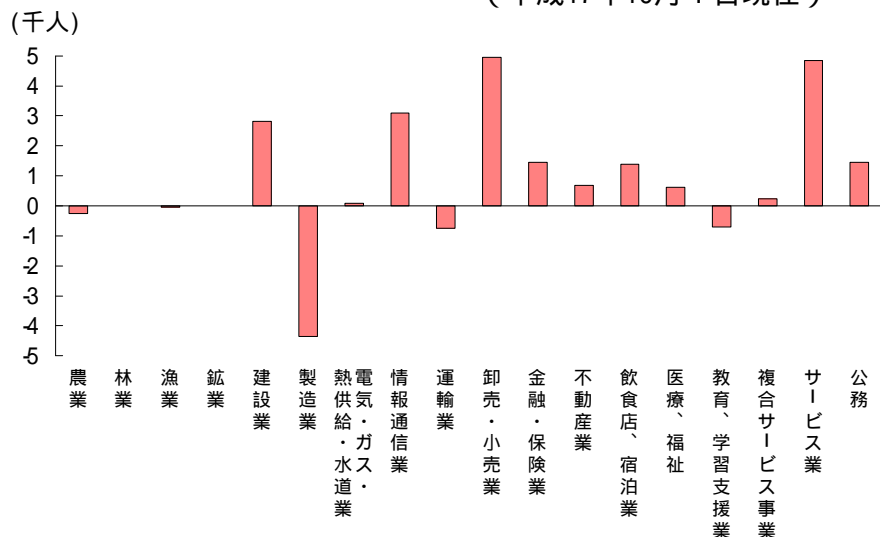
流入超過就業者を産業大分類別にみると、「卸売・小売業」が4,948人の流入超過で最も多く、以下、「サービス業（他に分類されないもの）」が4,844人、「情報通信業」が3,101人など、第3次産業を中心に11産業で流入超過となっている。一方、「製造業」は4,348人の流出超過となっており、以下、「運輸業」が754人、「教育、学習支援業」が698人など、6産業で流出超過となっている。

第9図 産業（大分類）別15歳以上就業者の流入・流出口  
（平成17年10月1日現在）



<資料> 総務省統計局「国勢調査」

第10図 産業（大分類）別15歳以上就業者の流入超過人口  
（平成17年10月1日現在）



<資料> 総務省統計局「国勢調査」



## 8 用語の定義・解説

### ( 昼間人口 )

従業地・通学地集計の結果を用いて、次により算出された人口をいう。昼間人口には、買物客など非定常的な移動については考慮していない。

$$A \text{市の昼間人口} = (A \text{市の常住人口}) - (A \text{市からの流出口}) + (A \text{市への流入人口})$$

### ( 常住人口 )

調査時に調査の地域に常住している人口をいい、「昼間人口」と対比する意味で「夜間人口」ともいう。

### ( 流入人口 )

他市区町村に常住し、当該市区で従業・通学する就業者・通学者をいう。

### ( 流出口 )

当該市区に常住し、他市区町村で従業・通学する就業者・通学者をいう。

### ( 流入超過人口 )

次により算出された人口をいう。

$$\text{流入超過人口} = (\text{流入人口}) - (\text{流出口})$$

### ( 昼夜間人口比率 )

常住人口100人当たりの昼間人口をいう。

### ( 通勤・通学依存度 )

他市町村に常住する15歳以上の就業者・通学者のうち当該市で従業・通学する者の割合をいう。

### ( 就業者 )

15歳以上の者について、調査期間中(平成17年9月24日～30日までの1週間)に賃金、給料、諸手当、営業収益、手数料、内職収入などの収入(現物収入を含む。)になる仕事を少しでもした人をいう。

### ( 通学者 )

調査期間中、学校に通っていた人をいう。学校には、小学校・中学校・高等学校・高等専門学校・短期大学・大学・大学院のほか、予備校・洋裁学校などの各種学校・専修学校に通っている場合も含まれる。